

日英言語比較：音量配置の相違

矢 吹 勝 二

日本人に英語を、英語国民に日本語を教えるときに注意すべき、音量配置の相違について考察してみたい。

音声言語の3要素——アクセント、イントネーション、プロミネンス——に関する音響測定器機を使用しての研究が、すでに始まっているが、まだ学界の定説を得るには至っていない。

そこで本稿では、学習の場で起る諸問題のうち、特に留意すべき点、今まで軽視されてきた点、ならびにほとんど指摘されなかった点などについて、具体例をあげてゆくことにする。

単語のアクセント

アクセントは、『個々の語について、社会的慣習として決まっている相対的な高低または強弱の配置』（『国語学辞典』）であるから、英語では hotel [*houtél*]、日本語では、ホテルのように、太字のホにアクセントをおく。

英語と日本語のアクセントの違い——

(1) 英語には、強弱アクセント (stress accent)、日本語には、高低アクセント (音楽的アクセント) (pitch accent) があると、一般的に言われている。しかし、最近の音響測定器機を用いての杉藤美代子氏の研究によると、『英語のアクセントも実際は声の高低によって決断されているのだという』（『日英語の比較』）

(2) 英語の one syllable の単語には、アクセントがないが、日本語の場合には、one syllable の単語でも、アクセントがあるものがあるが、それが無い単語との区別をするのに役立っている。このことは、日本語を学ぶ英語国民にとっては、最初の、しかも大きな驚きである。

次に、日本語の one syllable の単語のうち、アクセントのあるものを先にあげ、ないものを次のカッコの中に入れておく。なお、アクセントがあつたり、なかつたりする語は、両方に入れておく。

イ——威, 意, (胃, 亥)。

ウ——鶺, (卯)。

エ——絵, 餌, (柄)。

オ——尾, 緒。

カ——可, 科, 課, (蚊)。香は, ふた

通りあって、『全国アクセント

辞典』では、アクセントのある

方を先に、『日本語発音アクセ

ント辞典』では、ない方を先に

掲げている。

ガ——(我, 蛾)。

キ——木, 季, 奇, 期, 器, 機, (気,

黄)。

ギ——義, (義)。

ク——九, 区, 句, 苦。

グ——愚, 具, (具)。

ケ——封, (毛)。

ゲ——下。

コ——孤, 粉, 個, (子, 妓)。

ゴ——五, 期, 暮, 語, (後)。

サ——左, (差)。

ザ——座。

シ——士, 四, 史, 氏, 市, 死, 師,

(詩)。

ジ——字, 辞, 地, (痔, 地)。

ス——酢, (簀, 巢, 大根にすがはい

るのす)。

ズ——凶, 頭。

セ——背。

ゼ——是, (是)。

タ——田, 他, 多。

チ——地, 知, 智, (血)。

テ——手。

デ——出。

ト——都, (戸)。

ド——度。

ナ——菜, (名)。

ニ——二, 荷。

ネ——根, (子, 音, 値, 寝)。

ノ——野。

ハ——刃, 齒, 覇, (葉)。

バ——(場)。

ヒ——火, 比, 非, (日, 碑)。

ビ——美, 微。

フ——負, (駄, 斑, 腑, 譜)。	モ——(喪, 藻)。
ブ——部, (分)。	ヤ——矢, 家, 屋, 野。
ヘ——屁。	ユ——湯。
ホ——歩, 穂, 帆, (帆)。	ヨ——夜, 世, (世)。
マ——(間, 魔)。	リ——理, (利, 理)。
ミ——箕, (巳, 身, 実)。	ロ——(炉, 紹, 艚)。
ム——無。	ワ——和, 輪。
メ——目, 芽。	

(3) 英語では、ふたつ以上のシラブルをもつ語の中のどれかの母音にアクセントがあり、また primary accent と secondary accent とが分離して存在することもあるが (Japanese, dzæpəniiz), 日本語では、いくつものシラブルが連続して、高く発音される場合が多く、しかも2か所に分離してアクセントが存在することはない。これがまた、日本語を学ぶ英語国民にとっては、なかなか越えられない難所である。

例えば、横浜を、ヨコハマ、姓の村上を、ムラカミのように、太字のシラブルにアクセントをおく外人は、日本語のアクセントを知らないからである。

アクセントの表示には、日本語の場合にはいろいろあって、上記のように太字を使う場合や、日本語の発音辞典のように、ヨコハマとすることもあり、また内外で出版された日本語学習のテキストや参考書には、日本語をローマ字綴りにして、Yokóhama (このようにアクセント記号をつければ、ko だけを高く発音することになって間違いを起す)、または Yokoha—ma とする場合が多い。しかし、線を引いて高く発音されるシラブルを示すことは、不便で手間がかかる。なぜなら、このような記号は、英文タイプライターにないし、線の長さや位置を間違えずに手で書き入れることは、日本語学習の初心者には、実に厄介な作業である。

そこで私が考察したのは、アクセントのあるシラブルを大文字で書く方

法である。例えば、yoKOHAMA のように。英語国民にとって、大文字と小文字の使いわけは平易なことだし、タイプライターを使うときも便利で、アクセントのあるシラブルが一目で容易に見わけられる。

ここでついでに、内外で出版されたローマ字綴りの日本語学習書が使っている記号の間違った位置についてふれておきたい。それは、つまる音(促音)の場合である。例えば、発展をローマ字で、hatten と書くのはよいが、この語のアクセントを示すために、線記号を使って、tatten としている。これが私の表記方法によれば、hatTEN となる。この語は ha-(t)-TE-N の 4 syllables の語であるが、小文字の t が促音の無声であり、また最後の N はそれだけで母音を伴わないで one syllable になるのだという、日本語の特質を教えなければ、英語国民は、ha-TEN と two syllables に読む習慣から抜けきれない。

英語の辞典では、例えば、little の発音を [lit'əl] または [lit'tle] としている。ふたつ重なる t のうち、前の t は li と同時に発音されるからである。しかるに、日本語のローマ字綴りの場合に、なぜ hat ten としないで、間違って hatten とするのか？ いろいろ調べて、そのルートを探求していたところ、研究社の古い和英辞典に、hatten としてあることが分った。多分これは、日本語で、ハッテンと書くのを、そのままローマ字綴りにしたのだろうが、それをまねて諸外国でも、hatten のような間違った記号のつけ方をするようになったのであろう。それはともかくとして、日本語では、ッと小さく書いて、促音を示す記号を兼ねさせることができるのである。

ついでに、もうひとつ、日本語のローマ字綴りのうち、長母音を示す場合についてふれておきたい。内閣告示によると、「長音は母音字の上に(^)をつけて表わす。なお、大文字の場合は母音字を並べてもよい。」とあり、次の例があげられている。

obâsan, Tôkyô, Oosaka など。

へボン式では、長母音字の上に、細い横線（ $\bar{\quad}$ ）を引き、i の長母音だけは、i をふたつ並べて ii とすることになっている。

上記いずれの場合にも、母音字が長く発音されることを示すには役立つが、その長い音が同一レベルで発音されるのか、それとも高低の差があるのかを示すには役立たない。

そこで私は、長母音字を並べて書き、しかも前述のように、アクセントのあるシラブルは大文字で綴ることにして、記号（ $\overset{\wedge}{\bar{\quad}}$ ）の欠陥を改善することになっている。だから、上の例で示すと、oBASAN（小母さん、伯母さん、叔母さん）、oBAasan（お婆さん）、toOKYOO（東京）、oOSA-KA（大阪）となる。つまり、同じ a の長母音でも、Aa（前高、後低）、同じ o でも oO（前低、後高）または OO（前後とも高）であることが、誰にでもすぐ見分けられるのである。

(4) 日本語の単語には、英語の場合には見られない次のようなアクセントの型があり、それが類似の語との異同を聞き分けるのに役立っている。

(a) 箸（を使う）、HA-shi (o tsu-ka-u)。第1音節が高ければ、第2音節は必ず低くなる。これを**頭高型** (Down-flat Type) という。

(例) A-sa-hi（朝日）、FU-ji-sa-n（富士山）、A-ku-se-n-to（アクセント）、DA-i-i-(s)-se-n（第一線）、YA-bo-na（野暮な）、KI-re-e-na（奇麗な）、SHI-n-se-tsu-na（親切な）、YU-u-mo-ra-su-na（ユーモラスな）、KA-ku（書く）、SE-e-da-su（精出す）、TO-(T)-te-o-ku（取って置く）、SE-(P)-pa-tsu-ma-ru（切羽詰まる）など。

(b) 端（を揃える）、ha-SHI (O SO-RO-E-ru)。第1音節が低ければ、第2音節は必ず高くなり、その後の最後まで高い音が続き、しかも次に来る語の第1音節も高い場合を**平板型** (Up-flat A Type) という。

(例) ga-KU-SE-E (GA KI-ta, 学生が来た), mi-YA-GE-MO-NO (O KA-U, 土産物を買う), kyu-U-NA (YO-O-JI, 急な用事), u-TA-GA-U (HI-TO, 疑う人), ta-TE-NA-O-SU (TO-KI ga ki-

ta, 建て直す時が来た) など。

(c) 橋 (を渡る), ha-SHI (o wa-ta-ru)。前記 (b) と同じように, 第1音節が低く, 第2音節以下は高くなるが, つづいてくる次の語の第1音節が低くなる。これを**尾高型 (Up-flat B Type)** という。この型は, 形容詞や動詞にはない。

(例) ji-BI-KI (ga, 辞引が, GA でなく ga となる, 以下同様), ta-BE-MO-NO (ga, 食物が)。

このように助詞の「が, は」などは低く発音されるが, 「の」を使って形容詞の働きをさせるときに限り, 前からの高い調子がつづいて, no でなく NO と発音され, しかもその次に来る語の第1音節も高くなる。

(例) ha-TA ga hi-ru-ga-e-ru (旗がひるがえる), ha-TA NO NA-MI (旗の波, na-MI でなく NA-MI となる, 以下同様); a-SHI ga na-ga-i (足が長い), a-SHI NO YU-BI (足の指), ha-NA ga sa-i-ta (花が咲いた), ha-NA NO TSU-BO-MI (花の蕾); yu-KI ga tsu-mo-ru (雪がつもる), yu-KI NO YO-ru (雷の夜) など, しかし, 次のような例外もある。tsu-GI wa wa-ta-shi (次は私), tsu-GI no hi (次の日); fu-TA-TSU ni na-ru (二つになる), fu-TA-TSU no ko (二つの子); mi-N-NA ga a-tsu-ma-ru (みんなが集まる), mi-N-NA no chi-e (みんなの智慧) など。

しかし前述の (a) 頭高型の原則によって, 高い一音節の語の次に助詞が来るときには, 「の」も「は, が」と同様に, 低く発音される。

(例) E no te-n-ra-n-ka-i (絵の展覧会, no となり, NO とはならない, 以下同様), ME no u-e no ko-bu (目の上のこぶ), YU no o-n-do (湯の温度), KI no ha (木の葉) など。

(d) 大きい, o-O-KI-i, 驚く, o-DO-RO-ku などは, 第1音節が低い点で, 前記の (b) や (c) と同じであるが, 終わりのシラブルが, いくつかが低くなるので**中高型 (Up-down Type)** と呼んでいる。

(例) se-N-SE-e (先生), ku-RI-SU-ma-su (クリスマス), ge-HI-n-na (下品な), ni-GI-ya-ka-na (賑やかな), tsu-MA-RA-na-i (つまらない), a-RU-ku (歩く), o-KU-RI-KA-e-su (送り返す) など。

以上4種類の型の日本語名称は一般に使われていて、平板型以外を総称して起伏型とも言っているが、それらの英語名は、私がハワイ大学の黒川省三君と共編した *English-Romamized Japanese Dictionary for Practical Conversation* で、はじめて考え出して使ったものである。

(e) 助詞の「は、が、の、に」などは、独自のアクセントを持たないで、すぐ前に来る語の語尾が高く発音されれば高くなり、低く発音されれば低くなる。この原則に対する例外は、前述の(c)尾高型の語の次に「は、が」などが来る場合と、(c)の最後にあげた例のように、高い一音節の語の次の語の第一音節は必ず低く発音される場合だけである。

2 語連続または複合語のアクセント

2語連続の場合の英語のアクセントについては、ラジオでおなじみの東後勝明君が、その著『英会話の音法50』で具体例をあげ、わかりやすく説明しているので、少し引用させていただくことにしよう。

(1) 名詞+名詞——前の名詞が後の名詞を修飾するときには、前の方だけを強く発音する。tea pot (tea を強く), ink bottle (ink を強く)。しかし、apple pie や ice cream の場合には、両方を強く。

(2) 形容詞+名詞——ふた通りある。両方を強くすれば、an English teacher が、「英国人の先生」となり、前だけを強くすれば、「英語の先生」になる。

(3) 副詞+形容詞——He is quite tall, は quite と tall の両方を強く。

(4) 現在分詞+名詞——dancing teacher の両方を強めれば、いま「踊っている先生」、前の方だけを強めれば、「踊りを教える先生」となる。

日本語の場合には、名詞+名詞は複合語となり、ink bottle は i-N-K-U-tsu-bo, (tsu-BO でなく tsu-bo), 形容詞+名詞の場合には、形容詞の最後のシラブルの高さによって、次の名詞の第1音節の高さが決定される。(例) ta-NO-SHI-i na-tsu-ya-su-mi (楽しい夏休み, na-TSU-YA-su-mi でなく na-tsu-ya-su-mi), tsu-RA-I SHI-GO-TO (辛い仕事, shi-GO-TO でなく SHI-GO-TO), 副詞+形容詞や現在分詞+名詞の場合にも、前にくる語の最終シラブルの高さによって、次の語の第1音節の高さがきまる。(例) to-TE-MO TA-NO-SHI-i (とても楽しい, ta-NO-SHI-i でなく TA-NO-SHI-i)。副詞+動詞の場合も、副詞の語尾の高低が次の動詞の第1音節の高低を左右する。(例) HA-ya-ku na-ru (早くなる, NA-ru でなく na-ru), o-SO-KU NA-ru (遅くなる)。

複合語については、英語では、blackboard は黒板；black board の両語を分離して、それぞれを強く発音すれば、「黒い板」、greenhouse は温室；green house の両語を強く発音すれば、「緑色の家」になる。black, board, green, house などは、いずれも1音節の語でアクセントはないが、発音の強弱によって、かような意味の変化が生じることは、英語を教えるときに、特に注意すべき点である。

さて、日本語の名詞の複合語の場合には、次のようなアクセントに関する一定の型があることを、外国人によく説明しなければ、各語のアクセントをそのまま連結して、聞きなれない奇妙な発音をすることになる。その型を分類して例をあげると――

(1) **平板型+頭高型**——両者にアクセントの変化なし。(例) ko-TE-N (古典), O-n-ga-ku (音楽); ko-TE-N-O-n-ga-ku。kyo-O-I-KU (教育), E-e-ga (映画); Kyo-O-I-KU-E-e-ga。

(2) **平板型+中高型**——前者は不変、後者の第1音節が高に変わる。(例) ga-(k)-KO-O (学校), to-SHO-ka-n (図書館); ga-(k)-KO-O-TO-SHO-ka-n。ryo-KO-O (旅行), ko-GI-(T)-te (小切手); ryo-KO-O-KO-

GI-(T)-te。

(3) **中高型+頭高型**——前者が平板型に変わり、後者は不変。(例) ni-HO-n (日本), A-ru-pu-su (アルプス); ni-HO-N-A-ru-pu-su。shi-KE-n (試験), l-i-n (委員); shi-KE-N-l-i-n。

(4) **中高型+中高型**——前者が平板型に変わり、後者の第1音節が高に変わる。(例) ku-RI-SU-ma-su (クリスマス), pu-RE-ze-n-to (プレゼント); ku-RI-SU-MA-SU-PU-RE-ze-n-to。

(5) **平板型+平板型**——前者は不変、後者は頭高型に変わる。(例) da-N-TA-I (団体), ryo-KO-O (旅行); da-N-TA-I-RYO-ko-o。ni-HO-N-GO (日本語), ga-(k)-KO-O (学校); ni-HO-N-GO-GA-(K)-ko-o。

(6) **中高型+平板型**——前者は平板型に、後者は頭高型に変わる。(例) ji-DO-o-sha (自動車), ho-KE-N (保険); ji-DO-O-SHA-HO-ke-n。shi-KE-n (試験), mo-N-DA-I (問題); shi-KE-N-MO-n-da-i。

(7) **頭高型+頭高型**——前者は平板型に変わるが、後者は不変。(例) KA-ga-ku (化学), HE-n-ka (変化); ka-GA-KU-HE-n-ka。TE-e-ki (定期), KO-o-ro (航路); te-E-KI-KO-o-ro。

(8) **頭高型+中高型**——前者が平板型に、後者の第1音節が高に変わる。(例) DE-n-ki (電気), re-E-ZO-o-ko (冷蔵庫), de-N-KI-RE-E-ZO-o-ko。GE-n-shi (原子), bu-TSU-RI-ga-ku (物理学); ge-N-SHI-BU-TSU-RI-ga-ku。

(9) **頭高型+平板型**——前者が平板型に、後者が頭高型に変わる。(例) RA-ji-o (ラジオ), ho-O-SO-O (放送); ra-JI-O-HO-o-so-o。SE-ka-i (世界), ki-RO-KU (記録); se-KA-I-KI-ro-ko。

以上のように、(1) から (9) までの例では、すべて中高型になるが、次の雑では、そうはいかない。

(10) **雑**——(a) 前者が1音節の語の場合。(例) E (絵), ha-GA-KI (葉書); e-HA-ga-ki。GO (碁), i-SHI (石); go-l-SHI (碁石)。TE(手),

a-SHI (足) ; TE-a-shi. (b) 後者が1音節の語の場合。(例) NI-shi-ki (錦), E (絵), ni-SH-KI-e. A-sa (朝), hi (日) ; A-sa-hi. mi-GI (右), TE (手) ; mi-GI-TE.

以上のほかに, v. + v. (KA-ku, o-E-RU ; ka-KI-O-E-RU), n. + v. (I-ki, tsu-MA-ru ; i-KI-ZU-MA-ru), adj. + v. (ta-KA-i, su-GI-ru ; ta-KA-SU-GI-ru), adj. + adj. (ho-SO-i, na-GA-i ; ho-SO-NA-GA-i), n. + adj. (ke, fu-KA-i ; ke-BU-KA-i), v. + adj. (MI-ru, ku-RU-SHI-i ; mi-GU-RU-SHI-i) などもあるが, 中高型になる場合が多い。

文中の各語のアクセント

spoken language の場合には, written language とは異なり, 話し相手が面前にいるために, その顔つきや態度を見ながら, 意志の伝達をしようとするわけであるから, 文中の複合語を含む各語のアクセントよりも, 本稿の最初にふれたイントネーションやプロミネンスの方が重要な役割りを果たすことになる。そこで, これらの2点について, 英語と日本語とでは, 音量配置がどのように異なるかに注目してみよう。

英語の場合——日本人に英語を教える教師なら, 誰でもよく引用する例に, 次のふたつがある。(a) Is that so? の最後の so を尻上りに高く発音すれば, Really? (それは, ほんとですか) と尋ねる意味になり, so を尻さがりに低く発音すれば, I see. (なるほど, そうですか) と, 相手の発言を理解したことになる。(b) I beg your pardon. の場合には, 最後の pardon を尻さがりに低く発音すると, 相手の体にふれた時などに, 「どうも失礼しました」と, あやまる意味になり, それを尻上りに高く発音すれば, 相手の言ったことが, はっきりと聞きとれないので, 「え, なんですか, もう一度言ってください」と依頼する意味になる。

(a) の例の so は1音節だから, アクセントはない。(b) のpardon では, 第1音節にアクセントがあるので, あやまるときには, そのアクセン

ト通りに発音するわけであるが、聞き返す意味のときには、第2音節の方にアクセントが移される。

このように、各語固有のアクセントに関係なく、音の質や長短・高低・強弱・緩急などを変えて、コミュニケーションの効果をあげるための手段のひとつとしての**装飾音声**というものがあるわけだ。

この装飾音声を大別すると、イントネーションとプロミネンスになる。イントネーションは、さらに分類すると、感情的音調と論理的音調になるが、文の末尾が尻上りになれば、問いかけの気持を表わし、尻さがりになれば、断定的の意味になる。この両者の中間に位置する平板になれば、話しがまだ続くことを相手に知らせることになる。また文の途中の語でも、高い調子で話すことも多い。

一方、プロミネンスは、文中の重要な意味をもつ言葉なら、それがどこにあろうと、その位置には無関係に、強く発音するという点、つまりイントネーションは音の高さの変化であるのに対し、プロミネンスは音の強さの変化であるという点で、イントネーションとプロミネンスは異なるのである。

日本語の場合——以上述べたイントネーションとプロミネンスの、それぞれの特質や、両者の違いは、日本語の場合でも同じだと言える。「そうですか」の「か」を高い調子で発音すれば、問いかけになり、低く発音すれば、「なるほどねえ」という感じが出せる。

しかし、英語と日本語の構文的な相違により、問いかけの文の最後の「か」が常に高い調子で発音されるとは限らない。例えば、「あれは何ですか」の場合には、「何」にプロミネンスがおかれて強く発音されるために、最後の「か」は低く弱く発音されやすい。

また、「あなた、あした来る？」と尋ねるときには、「来る」の「る」にプロミネンスをおいて強く発音し、しかも文の末尾で問いかけの意味を表わすために、高い調子のイントネーションをおく。つまり、本来の KU-

ru が ku-RU に変化するのである。これは、さきほどあげた pardon の、第2音節にアクセントを移した場合と同じ発声方法である。

一般的に言って、英語でも日本語でも、同じ言葉にプロミネンスをおく場合が多い。例えば、I met him this morning の文で (1) I だけを強く発音すれば、not she but I の意味になり、(2) him だけを強く発音すれば、not her but him となり、(3) this morning だけを強く発音すれば、not yesterday but this morning という気持を表わすことになる。

この3種類のニュアンスの違いをローマ字綴りの日本語で書けば、こうなる——(1) waTASHI WA kesa kare ni atta. (2) watashi wa KAre ni kesa atta. (3) watashi wa kare ni KEsa atta.

最近の日本の若者、特に小・中学生の間に見られる、あの助詞などにプロミネンスをおく日本語特有の表現方法は注目に値する。例えば「私はこの本を彼にあげる」の「は、を、に」は、英語では、格の変化や語順によって不必要だから、これら（英語の preposition に対して、postposition と呼ばれている）にプロミネンスをおくことが出来ないのので、I, this book, him を強く発音するという点で、日本語とは音量配置が著しく異なる。

いくつかの日本語の単語をつらねて意志を伝達しようとするときに、プロミネンスを考慮に入れないで、普通のイントネーションで話せば、さきほどあげた例文は、waTASHI WA KEsa kare ni atta. となる。waTASHI・KEsa は、それぞれ個有のアクセントを保存しているが、kare と atta は、KA-re や A-(T)-ta からアクセントを消した形になっている。

この現象について、平山輝男編『全国アクセント辞典』のはしがきには、次のように書いてある。

『昔は話しことばも短かめに区切って、ていねいに発音していたものと思われるが、現代語では一般にテンポを早めて、一文を一息に発音する傾向が強くなった。共通語ではとくにこれがめだつ。』

だから、ha-NA ga sa-KU でなく、ha-NA ga sa-ku となり、sa-KU-RA no ha-NA でなく、sa-KU-RA NO HA-NA となるといった工合に、一息に発音するから、各語個有のアクセントの中には消滅するものが多く、またイントネーションの関係で、アクセントのない音節も高く発音される場合が多い。これに関する例は、さきほど「2語連続または複合語」のはじめの方にもあげておいた。

英語の子音と日本語の母音の無声化——英語では、What time is it? の場合に、What の t の次に time の t がつづくので、前の t は無声化する。(類例) I didn't tell you about it / about ten minutes / I forgot to ask you... / for the first time in my life / I went to Hawaii last summer.

同じような子音の無声化現象は、k や p の音が重なる場合にも起る。(例) ask karefully / talk kquickly / sip promptly / grip pople's hands.

しかし日本語では、i や u が子音にはさまれたり、アクセントのない語尾が、i か u で終わり、その前に子音がくると、無声化する。

(例) su-KO-shi (少し), hi-TO (人), tsu-KE-MO-NO (漬物),
ki-KA-i (機会, 機械), ku-TSU (靴), shi-HA-RA-u (支払う),
shi-TSU-re-e (失礼), ki-CHI-ki-chi (きちきち), ki-KE-N(危険)
など。

日本語の連濁と英語の音韻変化——日本語では、2語が連結して複合語をつくる場合に、second member の最初のシラブルの子音が、それに対応する濁音に変化するという、一般的な傾向が顕著に見られる。例えば、ya-KA-TA と FU-ne が ya-KA-TA-BU-ne に、KO-i と hi-TO が ko-I-BI-TO に、u-RA と to-O-RI が u-RA-DO-o-ri といった工合に。

しかし、ha-TSU と KO-i は、ha-TSU-GO-I とはならないで、ha-TSU-KO-I となる。甘い初恋には、濁音よりも清音の方が、ふさわしいからで

あろう。

また、first member に濁音が含まれているときには、second member の子音が濁音に変化することは稀である。濁音が多すぎて、不快な語感を与えるのを避けるためである。例えば、GI-n と ka が GI-n-ka (GI-n-ga でなく) に、hi-DA-RI と TE が hi-DA-RI-TE (hi-DAiRI-DE でなく) に、ZA-i と SA-n が ZA-i-sa-n (ZA-i-za-n でなく) に。

英語では、日本語と同じ連濁の現象は見られないが、d や v の濁音が、それに対応する清音 t や f に変化する場合がある。例えば、I have to go. の have が、[hæv, həv, əv] から [hæf, həf, əf] に変わり、iced tea の d が t に変化して、[éis tii] になったりする。

また、ham and eggs の and が省略されて、[hæm n égz] になったり、give me の v が省略されて、[gími] になったりする。

さらに、さきほど述べたような子音が重なるときの前の子音の省略ではなく、語尾の子音と次の語頭の母音が連結して、あたかもひとつの単語のように発音される点についても、特に英語の初学者に対して注意しておく必要がある。

日本語のシラブルは、母音と n のほかは、すべて子音+母音の形になっているので、子音で終わる英語の単語の語尾に母音を添えて発音する習慣が、日本の学生からなかなか抜け切れない。そこで私は常に学生に対してこう注意する——語尾の子音の次に母音ではじまる語がくるときには、その母音を前にくっつければ、別の母音を借りてきて子音の語にそえなくてもすむではないか、と。語尾の子音+語頭の y も同様。

(例) You have a nice house, haven't you? And a nice garden, too. All is quite around here. / not at all / first of all / So did I. / Thanks a lot. / not yet / food and drinks / Soak it in a cup of boiling water for a litte while. / Please sit on a cushion. / Thank you.

同音異義について——英語のアルファベットや日本語のかなが表音文字にあるのに対し、漢字は表意文字であり、しかも日本では中国から輸入した漢字のものとアクセントの区別を無視して、自由自在に漢字を組み合わせる習慣があるので、同音異義語が非常に多い。例えばコーショウ（交渉、高尚、鋳床、公称など）の同音異義語が、『広辞苑』には47あり、そのうちの23が、『研究社和英大辞典』に英訳されている。

しかし英語には、同音異義語は極めて少なく、(例) [eit] (ate, eight), [wí:k] (weak, week), [si:] (sea, see), [si:m] (seam, seem, [nait] (night, knight) などがある。しかし意味の混同はまずないし、日本語の場合でも、context から容易に理解できる。それが無理なときには、「わたくしりつの学校」とか、「いちりつの学校」とか言って、「私立学校」と「市立学校」の区別するという便利な方法もある。

Dr. Edwin O. Reischauer は駐日大使をしておられたころ、日本時事英語学会の年次大会での講演で、「日本語の新聞の見出しに、国体と大きく印刷されているのを見て、戦前の日本の国体論がまた始まったのかと思ったら、国民体育大会の略語であることが分かって安心した。」と話されたことがある。

また同博士は *The Japanese* の中で、かなと1,850の漢字を使って書く日本文が、外国人にとっては、日本語を master しにくい大きな原因だと述べておられる。この1,850の当用漢字が、昭和54年3月30日には、国語審議会（福島慎太郎会長）の内藤文相に対する中間答申で、19字を削除し、95字を加えて、合計1,926字を常用漢字にすることになった。

さらに同博士は、同書で、漢字を使わなくても Latin alphabet で不自由はないとも述べておられる。漢字やかなを覚えなければ、spoken Japanese がものにならないわけでもないから、諸外国人は、日本語のローマ字綴りで、短期間に効果的に spoken Japanese を master してもらいたいものである。

外来語について——荒川惣兵衛著の『外来語辞典』は、この種の辞典の中で最も多くを収録していて、その総数は25,000語以上、そのうちの約半数は、第二次世界大戦の終りからの20年間に日本語化したのだとのこと。こうなると、その大多数は英語からきたものだから、英語国民は日本語を知らなくても、それらの外来語を使えば、どうにか日常生活ができるだろうと、半ば冗談に、半ばまじめに話すアメリカ人もいる。

なるほど洋裁や料理、さてはスポーツ、レジャーなどの話になると、いわゆる片かなの外来語が盛んに出てくる。しかし、次の例が示すように、日本語と英語は、アクセントの違い、シラブルの数や長母音の高低などの点で、大きく異り、アメリカ人の話す英語は日本人に理解されたとしても、その英語の日本語化した単語を日本人が日本語流に話したり、日本語式の略語や日本製英語を使ったりしては、アメリカ人に通じない。

(英語) (カッコ内はシラブルの数) (外来日本語)

choc'•o•late (3)	cho-KO-RE-e-to (5), CHO-ko (2)
hel'i•cop•ter (4)	he-RI-KO-pu-ta-a (6), HE-ri (2)
Die'sel en'gine (4)	di-I-ZE-RU-E-n-ji-n (8)
O•lym'pic games (4)	o-RI-N-PI-(K)-KU-KYO-o-gi (9)
mass com•mu•ni•ca'tion (6)	ma-SU-KO-MYU-NI-KE-e-sho-n (9), ma-SU-KO-MI (4)
de•part'ment store (4)	de-PA-a-to (4)
tel'e•vi•sion (4)	te-RE-BI-jo-n (5), TE-re-bi (3)
mi'cro•phone (3)	ma-I-KU-RO-ho-n (6), MA-i-ku (3)
com•mut'ers town (4)	be-(d)-DO-TA-u-n (6)
night game (2)	NA-i-ta-a (4)

外来語にもいろいろな種類があって、日本に今までになかった物とか現象で、日本語で表現できないものは、英語その他の外来語を使わざるを得ない。しかし日本語で十分間に合うのにその言葉を捨てて、片かな英語を

使うのは、どうかと思うが、例えば道路に「スクールゾーン」と白ペンキで大きく書いてある。これは「学校地区」のことで、この漢字の四文字を道路に書くよりも、片かなの方が読みやすいから、いちがいに一方向的な理論だけで片づけるわけにもいかない。

だから、外来語のはんらんが、日本語にとって公害だとも断言できない。このことに関して、*Mainichi Daily News*, March 19, 1979に、Kyotoの Aun Amndsson という人が、*Readers' Forum* に、かなり長い文を寄稿している。その要点は次の通り。

『日本人が多数の外来語を使うのは、自分自身と日本語に自信があるからであろう。しかしフィンランドは、約800年間スウェーデンの、その後数百年間ソ連の統治下にあったが、フィンランド人のきらいなものは、外国語だった。つい最近あるフィンランド人が、テープレコーダーを意味するフィンランド語を考え出して賞をもらった。それまではロシア語を使っていたのだ。フィンランドの先生たちは、山奥で休暇を過し、そこに残る“pure”なフィンランド語を学ぶのを好む。トルコでは、標準トルコ語辞典の改訂版が発行されるごとに、それに収録される外来語が減少する。もちろん、日本の事情は異なる……but it might be wise for her to look at the experience of a country like Turkey, for example.』

む す び

英語国民が日本人に英語を教え、日本人が英語国民に日本語を教えるときに、日英両語間における音量配置の相違については、不十分な注意しか払われていないが、学習者の身になってみれば、この音量配置の相違に関する知識をまず最初に与えられることは、話し言葉として外国語を身につけるために必要な第一歩と言えよう。少くとも、本稿で略述した程度の骨子に、多くの例を加えて教えてやれば、自国語とは著しく異なる外国語の話

し方を意識的に身につけることが容易にできるであろう。

参 考 文 献

- 国語学辞典，国語学会編，東京堂，昭和44年，訂正17版，1,249ページ。
- 日英語の比較（現代の英語教育—8），研究社，昭和53年初版，236ページ。
- 全国アクセント辞典，平山輝男編，東京堂，昭和42年，10版，930ページ。
- 日本語発音アクセント辞典，日本放送協会編，日本放送出版協会，昭和41年，初版，16+1096+136ページ。
- 明解日本語アクセント辞典，金田一春彦監修，三省堂，昭和41年91版，926+68ページ。
- 英会話の音法50，東後勝明著，ジャパン・タイムズ社，昭和52年初版，221ページ。
- 広辞苑，新村出編，岩波書店，昭和44年第2版，2448ページ。
- Kenkyusha's New Japanese-English Dictionary*，増田綱編集主幹，研究社，1974，第4版，2110ページ。
- The Japanese*，by Edwin O. Reischauer，Charles E. Tuttle Co.，Tokyo，1978. 443 pp.
- 外来語辞典，荒川惣兵衛著，角川書店，昭和49年，38版，1534ページ。
- 日英語の比較研究，大江三郎著，南雲堂，1975年，294ページ。
- 日本文法研究，久野暲著，大修館書店，1973年，295ページ。
- 日英語の比較（現代英語教育講座7），研究社，昭和40年，201ページ。
- 日本語音韻の研究，金田一春彦著，東京堂，昭和45年3版，564ページ。
- 動詞の意味・用法の記述的研究，宮島達夫著，秀英出版，昭和47年，761ページ。
- Japanese in Action*，by Jack Seward，Weatherhill，Tokyo，1968. 213 pp.
- Foundations of Japanese Language*，by Matsuo Soga and Noriko Matsumoto，Taishukan，1978. 456 pp.
- Colloquial Japanese*，by Noboru Inamoto，Charles E. Tuttle Co.，Tokyo，1972. 436 pp.
- English-Romanized Japanese Dictionary for Practical Conversation*，by Katsuji Yabuki and Shozo Kurokawa，Japan Travel Bureau，1979. 419 pp.
- An Introduction to Modern Japanese*，by Osamu Mizutani and Nobuko Mizutani，Japan Times，1977. 425 pp.
- Easy Japanese*，by Fumiko Koide，Nippon Kyooiku Kiki Fukyu Center Co.，Tokyo，1971. Vol. I，118 pp. with 4 cassettes，Vol. II，123 pp. with 4 cassettes.
- Beginning Japanese*，by Eleanor Harz Jordan，Yale University Press，1967

- (6th printing). Vol. I, 409 pp., Vol. II, 410 pp.
- Learn Japanese : College Text, Vol. I*, by John Young and Kimiko Nakajima, East-West Center Press, Honolulu, 1970 (4th printing). 235 pp.
- Learn Japanese*, by John Young and Kimiko Nakajima, Tokyo, University of Maryland. Vol. I, 1963. 179 pp.; Vol. II, 1964. 199 pp.; Vol. III (by John Young and Shozo Kurokawa), 1964. 256 pp.
- Japanese : A Basic Course*, by Anthony Alfonso and Kazuaki Niimi, Australian National University, Canberra, and Sophia University, Tokyo, 1970. 525 pp.
- First Course in Japanese*, by Tamako Niwa, University of Washington Press, Seattle, 1971, Vol. I, p. 1-195 p; Vol. II, p. 196-429.
- An Introduction to General Linguistics*, by Francis P. Dinneen, Holt, Rinehart and Winston, Inc., New York, etc., 1967. 452 pp.
- Japanese*, by C. J. Dunn and S. Yanada, The English Universities Press, London, 1958. 310 pp.
- Essential Japanese*, by Samuel E. Martin, Charles E. Tuttle Co., Tokyo, 1970 (7th printing). 462 pp.
- Cortina's Conversational Japanese*, by Richard D. Abraham and Sannosuke Yamamoto, R. D. Cortina Co. Inc., New York, 1974 (5th revised ed.). 248 pp.
- Practical Japanese Conversation*, by Association for Overseas Technical Scholarship, Tokyo, 1976. 160 pp.